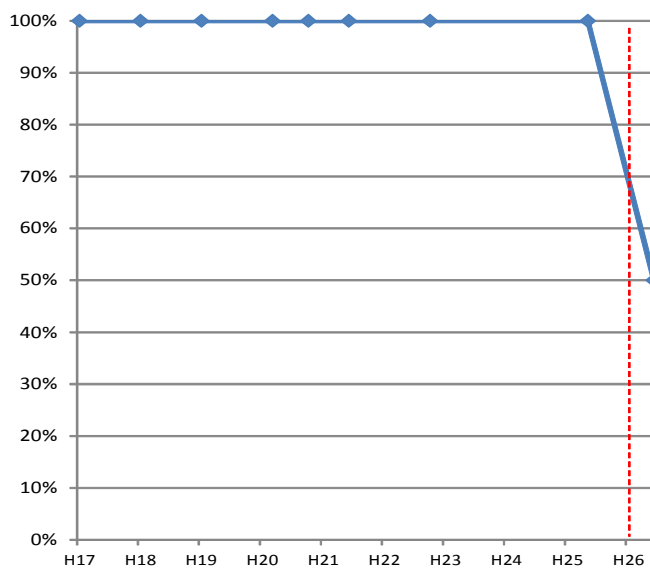


樹種名	エゴノキ	
科 目	エゴノキ科	
学 名	<i>Styrax japonica</i>	
分 布	北海道から九州・沖縄まで日本全国の雑木林に多く見られる。	
樹木特性	陰樹であり二次林に生息し、暗い環境では成長は困難であるが、比較的長寿な樹種であるため稚樹が暗い環境にある程度耐え閉ざされた林冠の下でも前生稚樹を形成できる。 幹が直立することから、萌芽更新を行う雑木林では株立ち状となり、萌芽力は強い。 生育環境が良好な場合では、寿命は最大樹齢が 100 年以上と推定され、埋土種子は無い。	
用途	床柱、玩具・傘のろくろ等として利用。	
植栽本数 (植栽密度)	10 本 (他樹種との混植)	
特 徴	【樹 形】 エゴノキ科の落葉小高木であり、高さは 10m ほどになる。樹皮は赤褐色できめが細かい。葉は両端ののがった楕円形で互生。花期は 5 月頃、横枝から出た小枝の先端に房状に白い花を下向きに多数つけ、芳香がある。花冠は 5 片に深く裂けるが大きくは開かずややつぼみ加減で咲き、雄しべは 10 本。品種により淡紅色の花をつける。 果実は長さ 2cm ほどの楕円形で、大きい種子を 1 個含む。熟すと果皮は不規則に破れて種子が露出する。 庭木等として栽培もするほか、緻密で粘り気があるため将棋のこま等の素材として利用される。	  
試験地での様子	普通苗を植栽し、植栽後虫害による被害が一部に見られたが、選定した調査木の現存率は 100 % と高い結果となった。平均樹高も 6m を超える程度にまで順調に生育している。 成長が良好であったことから、劣勢木を中心に一部を伐採した。	
被 害	シカの好きな植物とされ、幹の剥皮が顕著で、葉の被害もあるとされているが、当試験地では現時点で被害はない。 新梢にはしばしば菊花状の構造が認められるが、これはエゴノネコアシと呼ばれる虫こぶである。イネ科のアシボソを一次寄主とし、春に二次寄主であるエゴノキに移動して新芽を変形させて「虫こぶ」を形成する（寄主転換を行うアブラムシ）。	

エゴノキ 現存率



【現存率】

植栽後の自然枯死はないが、植栽木同士の被圧が見られたため、平成 23 年度に調査木の半数について本数調整伐（5 本）を実施した。

本数調整伐を実施した以外の調査木の現存率は 100 %（H 25.6 時点）である。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、現存率は 50.0%であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

【根元・胸高直径】

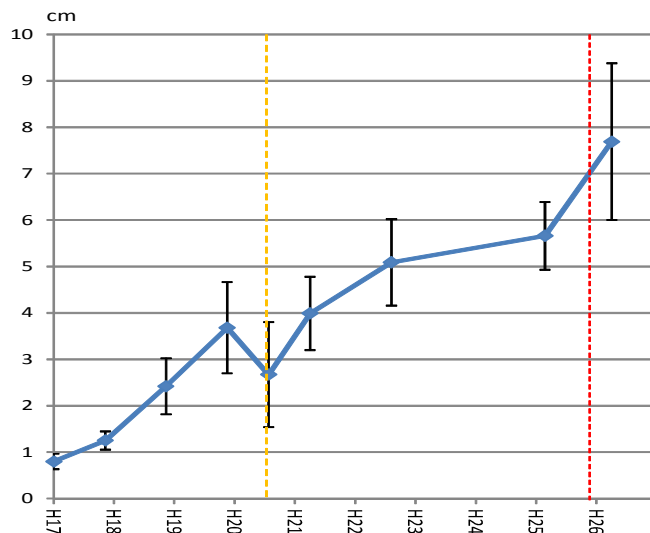
順調に成長している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均胸高直径は 7.69 cmであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

エゴノキ 根元・胸高直径



【樹 高】

順調に成長している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均樹高は 6.49m であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。



《プチ情報》

和名は、果実

を口に入れると喉や舌を刺激してえぐい（えぐい）ことに由来する。チシャノキ、

チサノキなどとも呼ばれ歌舞伎の演題『伽羅先代萩』に登場するちさの木（蔦苳の木）はこれである。齊墩果と宛字するが、本来はオリーブの漢名。ロクロギとも呼ばれる。

ヒゲナガゾウムシ科の甲虫・エゴヒゲナガゾウムシ（ウシヅラカミキリ） *Exechesops leucopis* (Jordan, 1928) が果実に穴を開けて産卵し幼虫が種子の内部を食べて成長するが落下種子内で休眠中の成熟幼虫を「ちしゃの虫」と呼び 1935 年ごろからウグイ、オイカワなどの川釣りの釣り餌として流通している。この昆虫の発生が見られる地点は散在的でありかなり稀であるが、発生地の種子の寄生率は 70%にも及ぶという。

果皮に有毒なサポニンを多く含んでいることから、昔は若い果実を石鹼と同じように洗剤として洗濯などに用いた。またサポニンには魚毒性があるので地方によっては魚の捕獲に使われたといわれるが、同様に毒流し漁に用いられたと言われるサンショウの樹皮との比較実験からエゴノキのサポニンの魚毒性の強さは漁に使えるほどのものではないと疑問視する見解もある。

エゴノキ 樹高

